
さあ、本当の不幸を教えてやろう

パワード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ、本当の不幸を教えてやろう

【Nコード】

N8828R

【作者名】

パワード

【あらすじ】

条 麻よりも不幸な人間秋島 不幸。

不幸不幸となげくはめになる少年の物語は、いったいどうなってしまうのだろうか・・・

序章 あらすじの延長みたいな感じ

序章 あのイマ ブレイ ーやろうが不幸なら俺はいいたい何なんだ！

ヒュードカン

俺は秋島 不幸。名前のとうり、とんでもなく不幸な人間だ。だってイマだって、たまたま居眠り運転の車が突撃した来て吹っ飛ばされたところだ。

まったく、昔からおれはなんで死なないんだろうか。居眠り運転の車にしょっちゅう出くわすし、運が悪ければ、不良十人くらいにぼっこぼっこにされたこともある。(もちろん、財布は持ってかれたさ)このくらは普通。ひどいときはもっとひどい。俺は本当に『不幸だーーーーーーーーーー』

第一話 この不幸の物語は今に始まったことじゃない（前書き）

どうも、秋島 不幸の物語が始まる。

不幸の物語が始まる。

まあ、あいつよりも不幸なことになる。

だけど、ココまで行くともはや『呪い』です。

まあ、主人公は『呪い』を自ら持ち、その力をあつかえてないんですから。

第一話 この不幸の物語は今に始まったことじゃない

第一話 この不幸の物語は今に始まったことじゃない

この世界は、普通の世界だ。

新世紀30年日本

人類は自分だけの力を手に入れていた。当時は超能力と呼ばれていたが、そのうち別の名前を得ていた。世界中に超能力が広がっていった。そんな世界に、不幸の少年がいた。

ヒューードカン!!!

「だ、大丈夫か!」

「こ、これは大変だ。早く救急車を」

「う、右足が大変なことに切れてるぞ」

そこはとあるところの交差点のど真ん中。青信号で横断歩道をしっかり渡っていたこの俺秋島不幸^{あきしま ふじう}は、たまたま居眠り運転の車に撥ね飛ばされた

のだ。え?、大変じゃないかって。そんなこと俺にはいつものことだ。え?なんでいつものことかだって?それはこの世界の人間が一人は持っている特殊能力『MOS (MマイOオリジナルSステータス)』と言う物だ。MOSは誰しもが持っており、個人によってほとんど同じものがないもんだ。ちなみに血縁の人間は同じようなMOSを手に入れやすい。(例え A君のMOSは幸運を招く力を持っている。A君の息子のB君は悪い未来から回避できる確立をあげる事が出来るMOSを手に入れる)

MOSは誕生してからすぐに手に入るけれど、その時点でのMOSは微弱なもので、5歳ほどでMOSの力を検査で調べることが出来る。幼稚園保育園というものはなく

、小学校がまとめて保育幼稚園の機能を果たしている。理由はMOSの暴走を防ぐためだ。ごくまれに想像もつかないようなMOSを持った子供が出てくる可能性があるし、5歳はMOSの力を測定できる。つまり、MOSがまともに使える状態が5歳という状態なのだ。そのために5歳の時から教育して暴走をとめるために徹底的に教育するためということだ。それでも、MOSを使った犯罪は消えないために警察もはや軍事組織といってもいいほどのものとなっている。10歳になるとだいたいのMOSが覚醒して使用可能。または使用開始。(理由は後ほど)

ちなみにMOSは5歳のときの測定のさいに分岐信号というものが出ることもある

。この信号が出た場合はメインのMOSから分岐して成長し、覚醒するあらたなMOSが現れることがあるということをする。木の枝は途中で分かれていくだろう。それと同じようにMOSを木と例えると、今までの木としての高さはそのまま受け継がれてそこから枝が生えると同じように、その時点までのMOSの成長を受け継いで新しいMOSとして生まれて覚醒する。だが大体的場合は分岐信号が出て、ほとんどの確立で分岐したMOSは貧弱になりやすいためにまず覚醒段階になる前に死滅してしまう。

ちなみに俺も分岐信号が出た。でるならもうすぐらしいけど、俺のMOS『不幸を呼ぶ体』^{バットボデー}は、本人の意思に関係なく発動するタイプのMOSで、その名のと通りの効果である

。しかもMOSでは大きくレベル1からレベル10に分けてあり、俺のMOSのレベルは10。ものすごく、不幸なことだ。そのために交通事故にあってしまったわけだ。

まあ、実はこの街の病院はレベル10のMOS『神の力さえ打ち消す(ゴットキャンセラー)』というMOSを持っている医者がいるから、ほとんど治ってしまうのだ。しかも俺は10歳のときからこんなことこの連続だからまあ、大体の痛みにもなれた。一時期に『体鍛えたら少しは痛みとか

やわらぐかも』という発想で体も鍛えている。しかも親は大手トレーニングジムの社長だ。トレーニングマシンなんか余るほどある。昔買い替えのときの旧式を1セツトもらって使っている。けど、やっぱり痛い・・・俺は救急車に積み込まれ、応急処置のために全身麻酔を施されたため、眠ってしまった。

第一話 この不幸の物語は今に始まったことじゃない（後書き）

微妙に改造版です。

どうでしょうか。

主人公は呪いを持っていて自分にその呪いをかけてしまっているんです。

じゃあ、呪いをコントロールしたとすれば・・・

次回第二話 日常を壊す新たな出会い？

第二話 日常を壊す新たな出会い？（前書き）

さあて、不幸は出会っちゃいますよ。

そのせいでもっと不幸なことに巻き込まれます。

けど、不幸は生きていきます。どんな不幸の中でもね。
さあ、本当の不幸を教えてやろう第二話 始まります。

第二話 日常を壊す新たな出会い？

第二話 日常を壊す新たな出会い？

「また君かい。昔からよく来るね」

「『神の力さえ打ち消す（ゴットキャンセラー）』も昔から変わってないな」

「ちょっと。君は大人に向かって敬語も無しかい」

「だって、僕とゴットキャンセラーの仲じゃないですか。あなたが始めて治療したのも僕だし」

「たしかに昔から君は大人にあまり敬語を使わない子だったね。まあ、そんな話はあとでもできる。治療を始めるよ」

「りょーかい」

ちなみに僕秋島不幸はついさっき車にひかれて、救急車で手術室に運ばれたところである。治療と言ってもMOSを使うために、ほとんど一瞬のように終わってしまう。こんなことを考えている間にもう終わってしまった。まったく。あいかわらずすごいものだ。

「終わったよ。君もすごいね、こんな大怪我してるのに顔色一つ変えずにされてられるね」

「そりゃなれてるからヘイキっすよ。じゃあ、これ治療費とファミレスの割引券おいてくから今度つかって。じゃあね」

俺は親がさっき置いていった封筒を机に置いて病院を出た。

ひかれたのは朝の学校への登校中だったため、かばんをもってすぐに学校へと向かった――

――俺は学校へと到着した。まったく、病院から学校はかなり距離あるから一時間もかかっちゃった。俺はいそいで自分の教室へと向かった。

俺は教室に着くと、ちょうどミニ休み時間の終わりで先生にばったりと会った。

「先生。遅れスンません」

「遅いぞ。早く席に着け」

「ほーい」

俺は教室の扉を開けた。その瞬間一瞬だけ教室内の全員が振り向いたが、俺の顔を見るなり一瞬で教室にいたほとんどが他の方向に顔を背けた。

そう。そりゃそうだ。俺みたいな不幸の塊が近くにいたらだれしも自分も不幸になるとか思うに決まっている。ただ一人を除いて。

「よっ、不幸！また車にひかれたか？それとも怪しい組織に連れ去られたとか！」

「一つ目が当たり。噂のレベル10に治療してもらって一瞬で直ったってところ」

「あそう。ちなみに一時間目の数学のノートのコピーやるよ」

「ありがとう」

俺に先生以外で唯一といってもいい話し相手の赤坂正男あかさか まさおがそうである。俺の前の席に座っており、この学校で唯一の知り合いでもある。とても親切で気が利くやつだ。俺もこのような友人を持って幸せに思っているくらいだ。まあ、同じ立場ならだれしも思うことであろう。

俺は二時間目の歴史を終え、ひとときの安らぎの時間中休みがやってきた。

俺は体育館裏にいつも読書をしに行く。意外と知られていない俺のささやかな趣味だ。

だが、本を開いた瞬間が真っ二つになった。

「!？」

「貴様は外見から想像できない趣味をもっているな」

俺は急いで真っ二つの本を投げ捨てて回りを見回した。

「誰もいない・・・ん？うわっ！」

周りを見ていると突然青い衝撃波が飛んできた。俺はそれをかわし、ふたたび周りを見回すと、今度は剣が飛んできた。剣は俺の真横に

ささった。

「いちお、チャンスはあげるよ。無意味だろうけどね！」

最後に力が入ったような声が聞こえた瞬間空から人が剣で斬りかかって来た。もちろん俺はすらっと（ギリギリ）かわしながら刺さっていた剣で一撃くわえてやろうと思ったら、急に体全身に不思議な違和感が走った。それから俺の体が自然としなやかに動き出した。普通の人間にはまず出来ないような動きで剣を敵に斬りつけていく。なんだ俺、おかしいほど強いぞ俺。カッコいいぞ俺。俺は斬りつけていき追い詰めてから力強い一撃を叩き込んでやった。

「つち、まさかこのタイミングでMOSが覚醒してしまうとはな。勝ち目はなさそうだ。今回は逃がしてやる」

「ちょ、まちやがれ！このくそ剣士」

つたく、突然来ては突然消えやがって。って、もう中休み終わってるじゃないか。早く戻らないと。俺は剣をその場に投げ捨ててさっさとかえろつと。

けど、MOSが覚醒したのかもしれない。家に帰ったあとに病院に行くか。

第二話 日常を壊す新たな出会い？（後書き）

謎の変な剣士が現れた。

さあ、どうしよう。まあ、どうでもいいけどさあ、

次の話はずいに展開が進みます。

次回第三話 襲撃そして

第三話 襲撃そして（前書き）

さあて、明かされます。 秋島不幸の新たなる力が？
いや？ちがうみたい。

第三話 襲撃そして

第三話 謎の組織

「よっ、放課後に用事ないなら映画見ない？」

俺の唯一の友達「赤坂正男あかさか まさおが誘ってきた。

だが俺にはあいにく用事がある。

俺のMOSを調べに行かなければならない。

「すまん赤坂、今日は病院に用事があるんだ」

「あ、もしかして分岐信号の確認か？」

「ああ、すまん。また今度」

「じゃあな」

俺あきしま ふじつ秋島不幸は走り出した。赤坂は俺に向かって大きく手を振りながら「じゃーな」と言っている。

俺は軽く走りながら病院に向かった――

――俺は病院にたどり着いて『MOS相談』と言うコーナーに向かった。

「すみません。MOS検査をお願いしたいんですが」

俺はポケットから学生証を出してコーナーの机に置いた。

「はい。今すぐ行いますか？」

「お願いします」

俺は「こちらです」と案内された方向に向かった。

しばらく歩いていくと、『MOS検査室』と書いてある部屋があった。

俺はこの部屋には何回か来たことはある。いや最低でも二回は来るはずだ。

その部屋に入ると、変な感覚が走り、俺は気絶した。

この検査の方法は特殊でどうゆう原理なのかはわからない。とにかく

く何かすごい技術が使われているのはわかる――

――「やああ、起きたようだね。結果出たよ」

「ホントか？それでどうだったの？」

「新しいMOSが覚醒していたよ。しかもまたまたレベル10だね」
「まじっすか！どんなMOSなんですか？」

「クライシスブレイカー。危機的状况を打破すると言う意味でなずけたんだ。そして肝心の能力は自分が

本能的に危機に陥っていると思うと、その状況を打破することのできる能力を得ることが出来ると言うことらしいよ」

「クライシスブレイカー。ちよっとかつこいいかも」

俺はベットの上でゴットキャンセラーの話を聞いていてなんだかんだで少し喜んだ。

だが、その喜びもつかの間。

突如、部屋の窓ガラスを突き破り人が入ってきた。

そいつはこう告げた。

「お前か。秋島 不幸というのは」

俺はベッドから飛び起き、言い返すような形でこういった。

「なんだお前は！」

すると、相手はこう告げた。

「俺は、貴様を殺すために『ある』組織に雇われた殺し屋だ」
「えー！！」

俺は驚きに顔を歪ませた。

第三話 襲撃そして（後書き）

次回第4話俺は夢をみてたのか？

第四話 俺は夢を見てたのか？ (前書き)

前回の続きです。

第四話 俺は夢を見てたのか？

第四話 能力覚醒

「俺はお前を殺しに来た」なんて突然言われたわけが分からなかった。

そんな人に恨まれるようなことした覚えはないし、怪しい組織に狙われるような協力的なMOSも持ってないし、分けわかんね。

「死ね、不幸!!」

謎の暗殺者は、剣を構えおれに突撃してきた。

俺は、どうにかかわして護身用に用意しておいた木刀を抜いた。

「こないだはやられたが、今度はまけねーぜ」

「ふん！返り討ちにしてやるぜ」

俺は暗殺者の言葉に言い返してから、手に持った木刀を暗殺者に突き刺すように突撃した。

だが、あっさり木刀をはられ、飛ばされた。

だが、暗殺者は次の瞬間部屋の窓ガラスから落ちていった。

「まさか、自殺か？」

俺が、ゴットキャンセラーに問うように言う。

そうすると、ゴットキャンセラーは断言した。

「自殺じゃない。逃げるために窓ガラスから出たんだ」

「なんでにげるんだ？」

俺の疑問に、ゴットキャンセラーは一泊遅れて答えた。

「だって、『エンジェル・ウイング』が近くにいるんだから」

「え！？エンジェル・ウイング！」

エンジェル・ウイング レベル10

たまにしている一つのMOSで複数の効果を持つ複合MOSの一つで、MOSの効果は飛行・射撃・太陽光発電&発電電気をコントロールとなっている。

このMOSの太陽光発電は、今一般的に使われているものよりも発電量は100倍にも値する量が発電可能である。

発電した電気を自由な形に変えて使用することが出来る。

国際警察MOS犯罪対策委員会戦闘部のエースであるアルフェ・シエルロンという少年がもっているMOSである。

だが、そんな人間がゴットキャンセラーしか珍しいもののないこんな病院にようがあるわけない。

となれば、暗殺者を追っていたのだろう。

だが、なぜここに暗殺者がくることが分かったのだろう。

あ！ゴットキャンセラーを狙いに着たのか。

俺は頭の中で勝手に理解して、とりあえず窓の外をのぞいてみることにした。

天使の羽を生やしたテレビでしか見たことのないアルフェと、さっきの暗殺者がたたかっていた。

俺は、なにも出来ず、窓の外を眺めていた

第四話 俺は夢を見てたのか？（後書き）

次回！ていうか今更ながら衝撃の展開！暗殺者とアルフェの熾烈を極める戦い！だがその戦いの中、ついに暗殺者のMOSが明かされる！！

さらに、戦いを病室から見ていた不幸がなんと？？？

衝撃の次回は？ 第五話 2rdMOS覚醒

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8828r/>

さあ、本当の不幸を教えてやろう

2012年1月8日00時52分発行